

武蔵野日曜聖書講筵

信実の神

――詩篇第31篇――

1976年11月7日

小池辰雄

汝の義が私の救い 聖名のゆえに キリストに在って 真実と信実 「三日月や十五夜抱いて
腰をすえ」 柱に寄り掛かって 「給え」は「給えり」 人格的・霊的な神 神は堅き城市 汝
ら雄々しかれ 真理と信実は一つ 祈り

【詩篇31】（私訳）

楽長に、「ダビデ」の絃歌

1 ヤーヴェーよ、われ汝に依頼む。

いつまでも我に恥なからしめ、

汝の義をもて我を助け給え。

2 汝の耳を我に傾けて速かに我を援け、

汝わがためわが力の巖となり、

我を救う砦の家郷となり給え。

3 げに汝はわが岩にして我が砦なり、

されば聖名のゆえ我を引きて導き給え。

4 彼らが我に隠し置ける網より我を曳き出し給え、

そは汝こそ我が砦なればなり。

5 汝の聖手にわが魂をゆだねまつる、

ヤーヴェー、信実の神よ！ 汝は我を贖い給えり。

6 我は憎む、虚しき偶像を崇む者らを、

されど我はヤーヴェーに依頼むなり。

7 我は汝の憐みを飲ぶ楽しまん。

それ汝はわが患難を顧み、わが魂の困窮を知り給う。

8 我を敵の手に閉じこめしめず、

わが脚を広き地に立たしめ給えり。

9 ヤーヴェーよ、憫み給え、我になやみあればなり！

わが眼痛恨のためにくらみたり、

わが魂もわが身も「衰えぬ」。



10 これ我が生命いのちは悲哀のため「消えなんとし」、
わが年華悲嘆のため果てんとす。
わが力わが不義のために尽き、
わが骨は枯れ果てぬ。

11 諸々の仇あだのゆえに我は恥辱はじとせられたり、
而もわが隣人となりびとに於て甚だし。
わが知人しりびとには忌み怖れられ、
街巷ちまたにて我を見る者は我を避く。

12 我は死者の如く念頭おもいより忘れられ、
破れたる器の如く我はなりしぞ！

13 それ多くの人の囁きささやを我は聞く、
惶懼おそれ四方にあり。

彼ら我に向かいて相議はかりしときは
わが生命いのちを奪わんと企てしなり。

14 されど我は、ヤーヴェーよ、我は汝に依頼よりたのみたり。
汝はわが神なりとわれ曰えり。

15 わが時期ときはすべて汝の聖手にあり、
我をわが敵の手と我に迫り迫る者より助け出し給え。

16 汝の僕のうえに聖顔みかおを輝かせ、
汝のいつくしみをもって我を救い給え。

17 ヤーヴェーよ、我に恥を負わしめ給わざれ、
われ汝を呼びまつればなり。

悪しき者に恥をうけしめ、
陰府よみにありて黙さしめ給え。

18 いつわりの唇をつぐましめ給え、
それらは義者むかに對いて不敵たかぶりにも高慢あなどりと侮蔑あなどりをもてもの言う。

19 何ぞ豊かなる、汝の恩沢めぐみ！
汝そを、畏るる者のために隠し給い、

汝に遁れゆく者に人の子らの前で施し給いし。
20 汝聖前みまえの蔭に彼らを隠して

人間の徒党ひとより「免れしめ」、
彼らを仮庵かりほにかくまいて

舌の紛争あらそいより「遠ざけ給う」。
21 讃むべき哉、ヤーヴェー！



彼は堅き城市^{しろ}にて我にその恩恵^{めぐみ}を奇しくも示せり。

22 されど我れわが驚異^{おどろき}に在りて言えらく、

我は汝の眼の前より断たれたりと。

然るに汝はわが切願^{ねがい}の声を聴き容れ給いき、

わが汝に呼ばわりしとき。

23 彼のすべての聖徒よ、ヤーヴェエーを愛せよ！

ヤーヴェエーは信実^{まこと}なる者を護り、

高慢^{たかぶり}を振舞う者には過度^{すぐ}るばかりに報い給う。

24 汝ら雄々しかれ、汝らの心を堅うせよ、

ヤーヴェエーを俟望^{まち}むすべての者よ！

● 汝の義が私の救い

人生にはいろいろな悩み、悲しみ、苦しみがある。そういう中で、この詩篇は極めて慰めに富んだ力強い詩篇です。私は自分の訳で読みます。

「ヤーヴェエーよ、われ汝に依頼^{よりたの}む。

いつまでも我に恥なからしめ、

汝の義をもて我を助け給え。

「われ汝に依り頼む」

という。人間の側からは、「信頼」というのが信仰の角度のいちばん大事なものです。

「を信ずる」

のではなくして、

「に信頼する」

です。

「キリストを信ずる」

というと、ちよつと角度が三人称式になつてくる。

「キリストに依り頼む、神に依り頼む」

ということ。汝に依り頼む。「信頼」という言葉を言うと、私は藤井先生を想いだす。藤井

先生は結局煮詰めれば、我たちに

「信頼」

ということを語っておられた。先生自身がその信頼生活をしておられたです、まさに一日千年の生活をね。

いつまでも我に恥なからしめ、

汝の義をもて我を助け給え。

「汝の義をもて我を助け給え」という。はい、これが大事な言葉です。



「汝の義をもて我を助けよ」

と。これは「汝の愛をもつて」ではない。「義をもつて助けよ」という。「義」という言葉は、こういう御言によって非常に親しくなる。

「汝の義をもて助けよ、救え」

でしょ。義が即ち救いなんです。汝の義が私の救いである。だから、「義をもて助けろ」ということになる。義で審かれてはしょうがない。

マルチン・ルターは、始めはキリストの義、神の義というものは審きの義だと思って、恐くしょうがなかった。ところが、汝の義が私の救いだという。その義に信頼する。

「義なる汝に信頼する」

ということです。

「汝の義をもて我を助け給え」

「義」は——いつも申し上げている通り、私たちは今この旧約の詩篇をキリスト中心に読んでいますよ、ただヤーヴェーの神ではない。キリスト中心です。ルターも、「神」とか「主」とかいふところをすぐ「キリスト」と考えている——神とキリスト、これはもう垂直関係で、神さまの御意を完全になし、神さまの生命を生命としていた。生命を生命とし、愛を愛とし、そういう関係にあつて、

「神さま100%に生きていた姿が義だ」

と言ったでしょ。その義、汝の義をキリストは無条件に十字架を通して与えてくださった。

「神の義は福音のうちに現れた」

とはそのことです。「汝の義」であつて、こっち側の義ではない。あなたの義。

「あなたの義が私の救いです、助けです」

と。旧約ではそういう意味ではないですよ、この詩篇のものと意味は。

「あなたの義でどうぞ私を助けて、敵をやっつけてください」

と、審きの面がだいぶこの義の中に、旧約の中では入っていますが、しかしそればかりではない。義というのは、救いの面では、イザヤ書では非常にそれがはつきり出てきますけれども。汝の義がわが助けである。それをいただくから、こちらが義人にされる。キリストの義をいただく。ルターが言ったでしょ、

「我々の罪とキリストの義——義と不義——との交換だ」

と。私たちの不義はみんなキリストが受けとつて、キリストの義はみんな私たちにくれた。こういう交換をキリストはしてくださった。そういう交換をすることが信仰だという。

「その信仰は指輪みたいなものだ」

なんてなことをルターが言っている。そういう指輪の交換。こちらはマイナスをあげて、プラスをくれた。プラスとマイナスの交換だという。こんな交換は世の中にないと。



●聖名のゆえに

2 汝の耳を我に傾けて速^{すみや}かに我を援^{たす}け、

汝わがためわが力^{いぢ}の巖^{いわ}となり、

我を救^{とりで}う砦^{いえ}の家郷^{いえ}となり給え。

「力の巖」だとか、「救う砦」だとか、ここで非常にその義に対して今度は、力です。あなたはその力だと。

3 げに汝はわが岩にして我が砦なり、

されば聖名のゆえ我を引き立て導き給え。

これは詩篇23篇と同じ精神です。

「御名の故をもて我をただしき路にみちびき給う」(詩篇23・3)

とあったね。

「聖名の故に我を導いてください」

と。これは聖名がやはり中心です。汝の義だ、汝の聖名だという。聖名の内容は義ですから。

「聖名のゆえに」は、「義のゆえに」といつて構わない。私たちの生活は、

「聖名のゆえに」

「聖名に在って」

「聖名のために」

の三つだ。「聖名のゆえ」というのは原因に、元になる。「聖名に在って」は現実になる。「聖名のために」は目的になる。「ために」というのは、先に出てはダメです。「ゆえに」が一番先です。「聖名のゆえに」「聖名にあつて」は原因で、もとですから。源なんだ。みなもとは「ゆえに」だ。「聖名のゆえに」と。だから今度は、その現実にくいて、次は目的になる、未来になる。「聖名のために」と。

「聖名のため、聖名のために」

といつて、「聖名のゆえに」がないと、ヘタすると、この「ために」はパリサイになる。他を審いて、

「私は聖名のためにやっている」

と、自己主張になる。パウロが始めそっちの「ために」の方だった。

「ヤーヴェーのために」「律法のために」

というわけだ。この律法が目的になっている。あぶないです。「のゆえに」と「に在って」がなければ、「のために」を言つてはいかん。ちよつと偉そうなんだね、「何々のために」なんていうと。「ために」なんて言わなくていい。自然に「ために」になってしまう。

「聖名のゆえにであつて、私たちの側ではありません。聖名が本当に原因でありますから、もとですから、そのゆえにどうぞ導いてください。こちらの救いのためではありません。救いのゆえでもありません。」



と。こちらの救いためになると、一生懸命にこっちから求めて、やれ何だかんだと、滝浴びしたり、いろいろなことになる。そういう熱心というのはあぶないです。そうして終いにはくたびれてしまう。熱心のない本当の熱心というのは上からくる。

●キリストに在って

「求めよ、さらば与えられん」

という。「求めよ」とは、こちらの救いを求めるのではない。

「キリストを求めよ」

ということ。キリストは自らを与えようとしているから、

「私を求めなさい。無条件に私をやるよ」

というのがキリストの恵みなんです。キリストそのものを求める。この求めはちつとも力が要らない。キリストは与えようとしているんだから、無条件に。こんな楽な求め方はない。ところが、

「一生懸命熱っぽく求めなければ得られない」

なんて、そうではない。

ただキリストを求める、その角度は出てこなければダメです。キリストのゆえに求めていく。こちらの救いのゆえではない。救いはおのずからやってくる場所の結果にすぎない。そこは完全に御利益信仰から抜けている角度です。御利益でも、観念でも、霊的傲慢でもない。そこが本当の福音の角度ですから。

聖霊が臨んできて、

「私はだいたい強くなった」

なんてやっているとかサタンになるですよ。御霊の事態もキリストは私しないますから。賜りたる現実です。

だから、「主さま！」と一言叫ぶことが、これが本当の求めなんです、「主さま！」と叫ぶことが。そうすると、その中に入ってしまう。「のゆえに」「に在って」の世界に入る。楽な魂になる。

I君が言っていた、

「原始福音にいた時は、なにかT先生がおつかないし、何を言い出すか分からないし。ところが、小池先生の話聞いて、本当に楽になりました」

と。人間の側のそんなことではない。だから――原始福音の悪口を言うわけではありませんけれども――いわゆる「ワッショイ、ワッショイ」になってくる。そうではなくて、静かな深さ、静かな熱です。時あつてかいくらでも爆発します。そういう角度は上から受けとっている。

だから、「信頼」が、自分の信頼というような気持を一生懸命やったって、それはダメですよ、



そういう信頼は。そこにどっかかり腰を下ろしてぶっ倒れている、ということが信頼なんです。そこに本当のエネルギーがくる。そしてもう、こっち側からかき立てたようなエネルギーよりかもっと凄いいエネルギーで動き出す。もうはつきりしてますよ。懐中電灯ではどうにもならない。こういう電気の電灯はちゃんと電源からやってきている。懐中電灯は始めはパーツと光るけれども、だんだん衰えてしまう。蓄電池ではダメなんです。

●真実と信実

⁴ 彼らが我に隠し置ける網^{あみ}より我を曳^ひき出し給え、

そは汝こそ我が砦なればなり。

「聖名のゆえ我を引き立て導き給え」

と。こういう言葉は、もう読むだけで力がきてしまう。だから、「汝は巖」だとか、「わが砦」だとか言わざるを得なくなってしまう。

⁵ 汝の聖手^{みて}にわが魂をゆだねまつる、

ヤーヴェー、信実^{まこと}の神よ！ 汝は我を贖い給えり。

この詩篇31篇の第5節、これは聖書の中で最も大事な言葉の一つです。こういう言葉は、はつきりと胸にきざんでおかなくてはいかん、いかなるときもこの言葉を。だいたい、キリストが十字架の上に叫んだ言葉です。

「汝の聖手にわが魂をゆだねまつる、ヤーヴェー、信実^{まこと}の神よ！ 汝は我を贖い給えり。」

これは、私は大好きな句です。私の信仰は何だといったら、この一言で答えてもいい。

「汝の聖手にわが魂をゆだねたてまつる」

と。「わが魂を」ということは、「わが全存在を」ということです。「ルーアッハ」「わが霊を」というと、なおさら、ある意味においては深いことになります。わが全存在の中心である霊を、わが霊をゆだねる。いちばん先に「汝の聖手に」と書いてある。

「汝の手にゆだねまつる、わが霊を。あなたは贖い給いました、私を。ヤーヴ

エーよ、神、信実の」

と、そういう順序になっている。

「汝の聖手にわが霊をゆだねまつる、ヤーヴェー、信実の神よ」

と。「信実の神」です。私は昔の訳には、「信実」という字はいわゆる「真実」という字を書いたが、これはいかにです、別に間違いではないけれども。「真実」は、心の主観的なまことですけれども。「信実」の方を書きます。

「信実」という字は、裏切らない、偽らないこと、これが信実です。偽りだの、裏切りだの、いろいろ謀^{はかりごと}をするのは、みんなサタンの角度ですから。傲慢、偽り、はかりごと、権謀術数、裏切り、これはみんなサタン。



ドイツ語でいうと、「トロイエ」(忠実、誠実)です。ヒルティが、

「人間としていちばん大事な性格はトロイエだ」

と言った。裏切らないこと、信実。これは実^{じつ}のあること、実^みのあることです。

「ヤーヴェー、信実の神よ!」

と。キリストの

「われは道なり、真理なり、生命なり」

という言葉の、「真理」といったって、観念的に考えてはいかん。この真理は、キリストが言われたのはまさにこの信実と同じ意味で言われた。

「私は、ヴァールハイト、アレイテイヤ(まこと)である」

ということは、

「私は、裏切らない、信^{まこと}の実を持ったところの内容をもったものだ」

と。真理という言葉はちよつと観念的に知恵の角度に響く。もちろん、その内容に展開はしてきますけれども。信実の神です。

「こっちはどうもドラマめだったり、間違ったり、いろいろでございませけれども、あなたはこちらの如何にかかわらず、信実をもつて貫いてくださる」

と。こっちの如何にかかわらず、神さまは信実をもつて、キリストは信実をもつて、貫いてくださる。

「ヤーヴェー、信実の神よ。キリスト、この信実の神よ」

と。だから、信頼できるんです。依り頼む。相手がこれでなかったら信頼できない。

「そのうちに裏切るかな。こっちがまずいという、どうかなるかな」

なんて。こっちの如何にかかわらない。だから、信頼せざるを得ない。ざるを得ない。

「信頼しよう」

なんていつているのではない。捕まってしまった、信実の神に。だから、もうどんな時でも、

「すみません」

と御前に平伏せば、これは必ず無条件に赦し、入れ給う。それはこの、

「ヤーヴェー、信実の神よ、汝われを贖い給えり!」

と。なぜ、その信実であるかという、と、「贖った」というこの事実が証明している。その罪びとを贖い給う。だから、「信実の神よ」と。私たちに言わせると、

「十字架の贖いをなし給うたキリストよ」

というわけです。

「汝われを――十字架をもつて――贖い給えり!」

と。この詩篇ではもちろん、十字架はないけれども、この「贖う」という言葉は旧約でも非常に大事な言葉です。



●「三日月や十五夜抱いて腰をすえ」

この「信実」というところで、まだちよつと言いたことがある。これは「エメス(エメツ)」という言葉で、「アアメン」という意味です。「アアメン」という字の名詞です。「アアメン」というのは形容詞ですけれども、「信実なる」ということ。

「エメス、アアメンの神よ」

と。如何なるときにも「然り」と言い給うところの、それを必ず実現する神。キリストという言は成るんです。これが「誠」(信実)なんです。面白いでしょ。言は成る。キリストという言は必ず成就する。これが信実(誠)、空約束でない。

「ヤーヴェー、信実の神よ！ 汝は我を贖い給えり。」

と。これはもう、相手をキリストとして読むときに、私たちはいつも贖われたる現実の中に直ちに入る。ガラテヤ書は正にパウロが、

「ユダヤ人は十字架のほかに行^{わざ}を求めているが、そうではない。十字架の贖いを徹底的に受ける。そうすると、御霊が必ずくるから」

と。またガラテヤ書では、御霊のことも非常に力強く語っている。だから、

「十字架と聖霊は別けるわけにはいかない」

と言っているんです。

「御霊のあるところに自由あり」

という言葉があるでしょ。

「主は即ち御霊なり。キリストは、自由を得させんために我らを解き放ち給えり」(ガラテヤ5・1)

「我らは御霊により、信仰によりて希望をいだし、義とせらるることを待つている」(ガラテヤ5・5)

と。「待つている」というのは義とされて、いいですか、現実には信仰の義をいだいているんだけど、今度は現実の本当の――我々の相対的な現実ではないです――本当に新天地における最後の現実において、義が私たちの中に現となる世界。救われているからいよいよそれを求めて行く。その時を求める。これは終末的信仰という。現実には、信仰の現実というのはいただいているが、生まの現実はまだ先の話だ、神さまの国は。だからいよいよそれを求めて進んでいくと、こういうわけです。

与えられているが故に、求めるんです。与えられないから、求めるのではない。与えられているから、既に三日月の中に入っているから、これが満月になろうという。

「三日月や十五夜抱いて腰をすえ」

という私の句はそのことです。三日月の中に光が来ている、完全性が来ている。

「三日月は十五夜の月を抱いて、やがて満月になるから、落ち着いて進んでいけ」

とまあ言うわけです。数学的にはこれはあと十二夜だよ――三日月と十五夜だと十八夜に



なつてしまつて今度は欠けてしまふ——こういう文学的表現を数学的に考えてはダメです。

「汝の聖手にわが魂を、霊をゆだねまつる」

と。即ち、いつもゆだねまつりて、その中に投げ身する。そうすると必ず力が来る。それは贖いという土台において。神さまの、キリストの信実の実証は十字架の贖いにあつた。だから既に、それは完了されたところで、それをいつも現実として受けとつていく。現実として受けとつていくその姿が、ゆだねられている姿、投げ込んだ姿です。そうすれば回転せざるを得ない。その回転していく力強い事態は、聖霊の事態である。こういうわけです。ところが、十字架なしに「聖霊、聖霊」なんて言っているから困るんだ。

ですから、観念でも、霊的傲慢でも、御利益でもない。みんな

「汝の聖名のゆえに、汝の義のゆえに」

ということ。そちらがいつもグルント、もとになっている。だから、ありがたくてしょうがない。

ところが観念のほうは、「十字架の贖い」ということをいわゆる信じて、「贖われている」という。それでは、ひとつも展開が始まらない。それは観念だから。観念だから展開しようと思うと、今度はまた自分の何かになつてくる。それで一生懸命で何かをやっている。そうすると今度はパリサイになる。もう決まっているんです。

●柱に寄り掛かつて

6 我は憎む、虚しき偶像を崇む者らを、

されど我はヤーヴェーに依頼むなり。

ヤーヴェーに依り頼まざるを得ない。何か自分が偉そうに依り頼むなんて思つたらダメですよ。

「私はヤーヴェーに依り頼まざるを得ない」

と。ざるを得ないんです。力がくるんです、そこには必ず。

私は時々、こうやつて柱に寄りかかつて立つて、寄つ掛かつて讚美歌を歌う。なぜ柱に寄り掛かつて讚美歌を歌うかというと、キリストに寄つかかっているという氣持を時々、自分でもつて体験するんです、そういう格好をして。「なんだ、先生はくたびれたのかな」なんて、そうじゃないよ(笑)。くたびれているんじゃないんです、あれは。

7 我は汝の憐みを喜び樂しまん。

それ汝はわが患難を顧み、わが魂の困窮を知り給う。

これはおもしろいでしょ。患難の中に苦しみがある。皆さんはいろいろおありかもしれませんが、現実。しかしながら、その中であつて

「我は汝の憐みを喜び樂しまん」

という。環境・運命というものが変わらなければ喜び樂しめない人は、いつまでたつても



ダメです。それがダメになると、またおかしくなる。そういった移りゆくところの、当てにならないところの相対的現実の中にあつて、絶対現実をつかまなければいけない。即ち、キリストの現実、キリストがわがうちにあるという現実、御霊のキリストがわがうちにあるという現実。これが本当に依り頼んでいるところの事態です。パウロはいつもその中にいたから、

「私はあなたの中だ、あなたは私の中だ」

と。だから、あのような患難も――幾度か死を脅かされている、迫害されている、誤解されている――かまひやしないよと。

「大丈夫！ 私の中のキリストを誰が倒すことができるか」

というわけです。それが即ち、

「我は汝の憐れみを歓び楽しまん」

ということ。「憐れみ」といつたつて、哀れっぽい気持で「憐れみ」なんていう言葉を読んではいかん。もの凄い恵みなんです。

「汝の恵みを歓び楽しまん」

と。ぜひとも皆さん、それだけの人に――本当に燃えて尽きないんです、「常燃の炎」と言つたでしょ――キリストを宿している時には常燃の炎となる。クリスチャンでくすぶつていたらダメですよ、何がどうなつたつて。

「あの人はずいぶんいろんな苦難の中にいるけれど、どうしてあんなにニコニコしているんだろう」

というような人にならなければね。そのニコニコしているのは、このキリストという驚くべき恵みをうちに持っているから、現実なんかチャンチャラおかしいというわけ。何がきつたつてびくともしない。いいですね。また肉体的に弱つたりなんかしても、キリストの力をそのようにして受けていく。「依り頼み」ということは、人間の側から何か偉そうに依り頼むなんていうことではない。

「われ汝の中にぶつ倒れる」

でいいですよ、「依り頼む」なんて言わなくなつて。汝の中にぶつ倒れてくださいよ。

「先生がどう思っている、どう言つた」

なんて下らないことを考えないでください。私の言っているのは、壇上から言っていることがいちばん本ものだから。

「小池先生なんてものはちよつとつかめないね、千変万化するから」

なんて言うが、しかしその千変万化するの、私がフラフラだからではない。もの凄い中心を持っているから、そういうわけです。



●「給え」は「給えり」

⁸ 我を敵の手に閉じこめしめず、

わが脚を広き地に立たしめ給えり。

⁹ ヤーヴェーよ、憫み給え、我になやみあればなり！

はい、その通り、正直に。けれども、「憫み給え」といつて、ただ「給え」だけでお終いになつてはダメですよ、こういう言葉は。

「ヤーヴェーよ、汝われを憫み給えり、我になやみあればなり」

と。「り」が付くんです、「給え」は「給えり」と。

「私に悩みがあるので、あなたは憐れんでくださいました、憐れんでおられます」と。祈りが直ちに現実に成就された現実に展開していく。

「何々をしてください」

とよくみんな祈るね。いいですよ。けれども、そのあとにもうその中に入っていないなければいかん。何の信仰ですか。神さまは一切を知り、我々の願い以上に聴いてくださるから、願いのあとでは、「給え」が「給えり」となる。

「憐れんでください。憐れんでくださいました。なんとすれば、憐れみそのものであるあなたが、私の中にいらつしやったから。現象面は現実には、その瞬間的現実には解決してなくていい。最大の解決は神さまの方でちゃんと持つていらつしやるから、何ものも恐れません」

ということ。いいですね。

わが眼痛恨のためにくらみたり、

わが魂もわが身も「衰えぬ」。

「衰えぬ」という言葉はありませんが、そういう気持です。

¹⁰ これ我が生命は悲哀のため「消えなんとし」、

この「消えなんとし」というのも私が付け加えた訳です。

わが年華悲嘆のために果てんとす。

わが力わが不義のために尽き、

わが骨は枯れ果てぬ。

人間の側を見れば、だれも罪びとだから、そこで「不義」なんていうことを言ったんだけど、

¹¹ 諸々の仇のゆえに我は恥辱とせられたり、

而もわが隣人に於て甚だし。

わが知人には忌み怖れられ、

街巷にて我を見る者は我を避く。

だいぶんいろんなことに出つくわしている人だな。



¹² 我は死者の如く念頭より忘れられ、
破れたる器の如く我はなりしぞ！

「破れ器」とちゃんとここにも書いてある。破れ器と私は言ったけれども、旧約の中にちゃんとこういう言葉があった。八方破れです。八方破れがいちばんいい。八方破れの構えは構えざる構えなんです。八方破れだと、キリストはどこからでも入っていらつしやる。整っている、キリストは入りようがないでしょ、破れていないと。

「破れたる器の如く我はなりしぞ」

と。だいたい、破れないような顔しているのはチャンチャラおかしいよ。みんな破れているんです。

「放蕩息子の譬話」で、片一方の兄貴は品行方正——方正というのは真四角で正しい——品行方正で学術優等。弟の放蕩息子は三角。お父さんは丸だ。三角は悔い改めると必ず丸の中に入ってしまう。四角は必ずしも入らない。真四角なら入るけれども。とにかく、それは父の心にならなければダメだ。兄は父の心を心としないで、いつまでも四角張っているから、帰ってきた弟に

「お前はけしからん」

なんて言った。

「よし、やり直そう」

と言って、弟と一緒にの気持ちにならなければダメだ。兄は霊的傲慢。弟は破れから碎けにきた。碎けを与えてくださっているのがキリストの十字架ですから。自分で碎けようなんていつたって、碎けきれやしませんよ。十字架の碎けを賜っているから、我々は八方破れであるから、キリストは自在に入っていらつしやる。八方破れが本当に円現するんです。

●人格的・霊的な神

¹³ それ多くの人の囁きを我は聞く、

おそれよも
惶懼四方にあり。

彼ら我に向かいて相議りしときは

わが生命を奪わんと企てしなり。

こういう状態はよくあるね。一生懸命で陰で何のかんのとやっている。人間の関係というのはみんなこういうことで崩れていく。一対一でぶつかって話し合うのがいちばんいい。三人称的に何のかんの言ったら、みんなこれは崩れていく。ゲーテも、『ウェルテルの悩み』の中で言っている。そういう誤解に基づくことがいかに多いかということ。うわさというの尾ひれがついちやう。よき噂はまだいいけれども。噂というのはだいたいみんな悪いことを言っつてね、それにだんだん尾ひれがついていく。

¹⁴ されど我は、ヤーヴェーよ、我は汝に依頼みたり。



汝はわが神なりとわれ曰えり。

いいよ、人間の噂なんかどうでも。

「私はあなたに依り頼みました。人にどう思われようと一向差し支えありません」と。

「汝はわが神なりとわれ曰えり」

敵が多ければ多いほど強くならなくてはダメですよ。私がそうなんだ。私はいろんなマイナスをぜんぶ逆にプラスにしよう。

どうしてこういうことになったかね。不思議でしょうがない。自分の信仰だの、自分の実存なんて、そんなものはもう私は無いから。親鸞ではないけれども、信仰すら、信すら賜りたるものです。これはもう平面論理では分らないですよ、こういう言葉は。

空気みたいだよな。空気みたいに何も抵抗しない。抵抗しないが、この空気の中から逃げるわけにはいかない。そういう現実なんだ、キリストの現実というのは。そういう信が即ち現なりという。空気は見えない。けれども、これほど素晴らしい現実はない。空気は私たちの毛穴からも入ってくる。

¹⁵わが時期はすべて汝の聖手にあり、

私の諸々の時期は、そしていろいろなカイロスがあるが、あなたの聖手にありますと。

我をわが敵の手と我に追い迫る者より助け出し給え。

¹⁶汝の僕のうえに聖顔を輝かせ、

はい。今度は、「汝の僕」と言いました、自分のことを。「あなたの僕です」と。聖意を喜ぶ者、聖意を体現しようとしている者が「僕」です。だから、聖顔が輝いてくる。

汝のいつくしきをもつて我を救い給え。

「聖顔の輝き」という言葉と、「いつくしき」という言葉を相、対にして使っていますね。神さまに向かって、「汝の聖顔」といつたつて困るよな、そうすると何か偶像的なものを考えて。そうじゃない。旧約の世界というものは、活ける人の現実をそのまま表現して、しかも相手が霊的な神である。これが人格的・霊的というわけです。キリストがまさにその角度から「父よ」と言われたわけです。

●神は堅き城市

¹⁷ヤーヴェーよ、我に恥を負わしめ給わざれ、

われ汝を呼びまつればなり。

悪しき者に恥をうけしめ、

陰府にありて黙さしめ給え。

陰府に行けばもうダメだと。死んでしまう。

¹⁸いつわりの唇をつぐましめ給え、



それらは義者^{むか}に対して不敵^{たかぶり}にも高慢^{あなどり}と侮蔑^{あなどり}をもてもの言う。

高慢と侮蔑、偽りはみな相通じている。高慢と侮蔑は同じことを別の角度で言った。

「サタンは人殺しで、偽り者だ」

とキリストがヨハネ伝10章で言つてらつしやるとおり、偽りの父、人殺しの源だ。まあ世の中には、戦争はその最たる悪いものですが、世界の歴史は終わりに至るまでそういう血なまぐさい、いやらしいことがある。今もどこかで人が殺されている。

「蛇の如くきとく、鳩のごとく素直なれ」

と。蛇のごとくきとくずる賢く偽りを言うひとがなきにしもあらず。そういうのは困る。それは聖霊の世界ではない。あの「蛇の如くきとく」というキリストの言葉は躓きになる。蛇のやつはずる賢いやつだが、その「ずる」だけはとらなくてはいいかん。大愚に、本当はバカ者になればいい。大愚が大賢なんです。あれは良寛か、「大愚」と言つたのは。政治家にも本当に霊的な人物が出なければダメなんですよ、日本の政治もいつまでたつても。

19 何ぞ豊かなる、汝の恩沢^{めぐみ}！

汝そを、畏るる者のために隠し給い、

汝に遁^{のが}れゆく者に人の子らの前で施し給いし。

「何ぞ豊かなる、汝の恩沢^{めぐみ}！」

と。本当にそうです。

20 汝聖^{みまへ}前の蔭に彼らを隠して

人間の徒党^{ひとがら}より「免れしめ」、

彼らを飯庵^{かりほ}にかくまいて

舌の紛争^{あらそい}より「遠ざけ給う」。

避け所だね、「いわゆる徒党、争いから、私たちを遠ざけ、免れしめてください」と。これはパウロが言っているような言葉だな。

21 讃^ほむべき哉、ヤーヴェー！

彼は堅き城市^{しろ}にて我にその恩恵^{めぐみ}を奇^{くす}しくも示せり。

「彼」はなんて、三人称的に言っているけれども。

22 されど我れわが驚異^{おどろき}に在りて言えらく、

我は汝の眼の前より断たれたりと。

あわてたんだよ、この驚きは。目の前から断たれたなんて思ってしまったから。

然るに汝はわが切願^{ねがひ}の声を聴き容れ給いき、

わが汝に呼ばわりしとき。

ダメだと思つたら、どつこい大丈夫だったと。



● 汝ら雄々しかれ

²³ 彼のすべての聖徒よ、ヤーヴェーを愛せよ！

今度は「愛せよ」という言葉が出てきたな。

ヤーヴェーは信実なる者を護り、

アアメンなる者を護り、

高慢を振舞う者には過度るばかりに報い給う。

十分報いてくださる。

「彼のすべての聖徒よ、ヤーヴェーを愛せよ！」

と。23節、

「聖徒よ、神を愛せよ」

という。贖われたる者が「聖徒」なんです。何も特別に聖と言うことはない。「聖」という言葉はみだりに使ってはいかん。「聖」は

「聖名を聖とする」

こと。

「聖名を崇めさせ給え」

とは、

「聖名を聖とする」

ということ。聖なる者は神・キリストの外にない。我々が「聖徒」というのは、「聖を賜りたる徒」なのであって、こちら側が手放して聖徒なんかでは絶対じゃない。アウグスティヌスだとか何とかがみな聖徒に列せられるけれども、彼は死の床で詩篇32篇を読んで、罪の贖いを感謝して往った。

だから、私には「聖会」という言葉がちよつと気になる。人間の側で「聖会」なんてやると、こちらでもつて一生懸命でなにか神聖にしようと思つて。そういう聖会という言葉は――時々この頃、聖会という言葉を使ったりしますけれども――よした方がよさそうだ。聖の世界を人間の側に下ろしてはいかん。その点ではやはり法然、親鸞の角度の信仰の方が、何といふかね、いいようだ。

²⁴ 汝ら雄々しかれ、汝らの心を堅うせよ、

ヤーヴェーを俟望むすべての者よ！

非常に力強いです、終わりは。

「汝ら雄々しかれ！」

と、キリストが言われた。こういう言葉はやはりキリストは、詩篇の言葉をああやって活かしておられるわけですね。

「汝ら雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

という。



「汝らの心を堅うせよ、ヤーヴェーを俟望^{まち}むすべての者よ！」
と。最初の1節に、

「ヤーヴェーに依り頼む」

と言って、また最後にやはり

「ヤーヴェーに俟望^{まち}む」

ことを言っている。

「俟望^{まち}む」「信頼する」

という言葉がどうもまた躓きになるんだね。

●真理と信実是一つ

この信実の神、私たちにとってキリストは、

「われは真理なり、生命なり、道なり」

と。まあ普通、あれは「真理」と訳しているから、真理でもいいけれども。真理の実存的な姿が「信実」なんです。思われたる真理は何にもならん。それは観念ですから。真理を体現している姿が信実なんです。

『真理なり』という言葉がへたすると観念に響くから困る」

と私は言っている。神の真理を体現している、それをむしろ「信実」と言っていいたいと思う。だから、真理と信実は一つです。即ち、本当の生命はこういう内容を持っていなければ、生命でない。「長くながらえる」なんてのは生命ではない。こういう実質を持っている。

「自分は神さまへの、天国の世界への、新天新地へ連れて行く道そのものだ。私を通らなければ、私をしつかり^ふ踐んで行かなければダメだ」

と。しかも、申し上げている通り、この生命の、真理のいちばん内容は何かということ、

「信仰^{のぞみ}と希望と愛は……」

とパウロが言った、「愛」です。そして、これがまた「義」であるわけです。

「義と愛は同じことの別な表現にすぎない」

と言ってもいいくらいです。

神さまの心というのは何かというと、愛なんだからね。その心に、神の思いを完全に満たしていく、従っていくのが義の姿なんだから、これはもう離すわけにいかない。

しかし、その御意^{みこころ}に背く^{そむ}ことが「罪」だから、どうしても「十字架」がここに必要になる。

「背かざる姿を背ける者に与える」

というのが、これが贖いの事態だから。義を与える。

「汝の義をもて救い給え」

と。内容は何だと思ったら「愛」だったと、こういうわけです。

キリストは神さまの聖意を徹底的に行ったのに、キリストは捨てられたでしょ。一応、



捨てられた。

「何ぞ、われを捨て給いし」

と詩篇22篇にある。

「私はあなたの聖意を完全に、死に至るまで忠実に守った。その私をなぜ、お捨てになるか。あなたの義が立たないではないですか。」

「義が立たないではないですか」

というのが、

「なんぞ捨て給いし」

ということ。だから、義の叫びなんです。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

と。ヨブの義とは違うけれども。ヨブも自分は義人だと言って、さかんに食いついたわけです。けれども、キリストはもちろん、この義を私している義ではないですから。全く平伏している姿が義なんです。その素晴らしい実存ができないのが人間の罪だから、

「その罪を全部背負しよしました」

というのが、この十字架だから。

「この義の内容を全部やるよ」

というのが「愛」なんだから。「義」をもって贖い、贖われた内容は何だと思ったら愛だったと。贖われて、いただいた内容は何だと思ったら愛だと。そして、愛はどんな力を持っているかというと、

「聖霊の力を持っている愛であつた」

と、こういうことです。全部これはまた分けることはできません。

「汝の聖手にわが霊を完全におゆだねいたします。でなければ、私は生きていられません。あなたの信実に貫かれているから、信実なる愛に貫かれているから、贖ってくださいだから」

と。贖ってくださったという事態は愛ですから。義をもって贖った。贖った内容は愛であつたと、こういうわけです。まあ、説明なんていうものはしょうがないものです。詩篇31篇の中心は、何といつても、第5節です。

⁵ 汝の聖手みてにわが魂をゆだねまつる、

ヤーヴェー、信実まことの神よ！ 汝は我を贖い給えり。

この一句。そうしたら、どんな悩みがこようが、敵がいようが、誤解されようが、迫害されようが、もう本当に自分の中には力がある。だから、

「汝はわが力なり、わが巖いわなり、わが城なり」

なんてやっているだけ。31篇は非常に福音的な詩です。では今日はそこまで。



● 祈り

主さま、十字架上で、

「わが霊を汝にゆだね」

と、実に始めから終わりまであなたは神さまにその霊をゆだね、そして全存在をゆだね、

「この私が引き受けた」

と、父なる神のみ力によつて展開また展開、自由自在に歩き給うたところの主さま。私たちはまた、あなたにそのようにして、あなたの贖いの力をいただき、この聖霊をいただき、そして進んで参りたく存じます。そうでなければ、生きようがありません。相対的現実の渦巻く中で、しかし、絶対なる現実をその中につかみ、そして、恐れなくいきます。それは私たちの力みでも、私たちの信仰でも、実存でも、何でもありません。あなたが私たちの中にやつて来てくださるから、御霊をもつて包んでくださるから、驚くべきことが展開してやみません。

本当に、ざるを得ないところのこの福音の現実はなんとうれしいことか。行き詰まれば行き詰まるほど、混乱があればあるほど、敵がいればいるほど、いよいよ力強くされるとは、なんと不思議なことではありませんか。

神さま、どうぞ、私たちはそのようにして福音の証し人となりたく存じます。パウロ、ペテロ、ヨハネはみなそのようにして生きました。この孤軍万軍、天界にその万軍が私たちの味方であります。また、私たちは本当にその意味において一人びとりが友軍となつて進んで行きます。

かくして、この東京の集会も、また京都、大阪、小諸、またその他方々の同志のひとたちが本当に友垣を単に小さく作るのではなく、限りなく展開なさしめたまわんことを切に願ひ奉ります。

この僕の小さき著作集も、あなたのみ力により、聖名のゆえをもつて、また本当に証をしていくたく存じております。この兄弟姉妹たちのその協力を本当に感謝しておりますが、私たちはそのようにしてただ主イエス・キリストの聖名の崇められんことをだけ願ひつて進んで参ります。

今日は、このようにして兄弟姉妹たち、また久しぶりの兄弟もいますが、どうぞ、一切が聖書一卷驚くべきドラマの中に投身しながら、いよいよ自分自身があなたのドラマを展開していく者とならしめたまわんことを切に願ひ奉る。主イエス・キリストの聖名により献げ奉る。アーメン。

